

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「から」と「ので」の用法
Author(s)	アンドリ スマルヤディ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1992 : 43 - 48
Issue Date	1993-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039328
Right	
Relation	



「から」と「ので」の用法

アンドリ スマルヤディ

1. はじめに

日本語では原因・理由を表すのに使う言葉はいろいろある。でも、同じ意味としても入れ変えられる場合もあれば、入れ変えられない場合もある。このレポートの内容のような「から」と「ので」の用法についても、「から」しか使えない文と「ので」しか使えない文が案外にあるわけである。ちょっと難しいと思うが、理論的にこの「から」と「ので」の用法を説明したいと思う。

2. 「から」の用法

鈴木(1990)『文法Ⅰ』では、接続詞の「から」は古くは格助詞「から」と同じものであったが、後に接続助詞として分化してきたものといわれている。

富田(1992)『基礎表現50とその教え方』では、日本語文法では一般に「ので」は「現実にある、あるいは、あった行動や根拠の原因・理由」を示し、「から」話し手の「意志、考えなどの原因・理由(根拠)」を示すと述べられている。

これに従って、日本語教育でも「ので」と「から」の区別をしている。

1. 原因・理由「ので」: 現実にある/あった行動や状況。

(例)①A-さんは、今日、病気なので、学校を休んでいます。

2. 原因・理由「から」: 話し手の意志、考え。

(例)②わたしは、今日、頭が痛いから、早く帰ろうと思っています。

例①で、「学校を休んでいる」というA-さんの現実の理由は「病気である」ということだ。

例②で、「早く帰ろうと思っている」というわたしの考えの理由(根拠)は「頭が痛い」ということだ。

それで、鈴木(1990)『文法Ⅰ』(P196)では、永野覽氏が「伝達論にもとづく日本語文法の研究」で、次のようにいっている。

『「から」は、後件に対する理由や根拠を主観的に説明するものであり、言わば、後件がテーマで、前件がその解説である。すなわち、「から」で結びつけられる前件・後件は、元来二つのものであって、それが、話し手の主観によって原因・結果、理由・帰結の関係で結びつけられる。さらに言えば、その結びつきは話し手の判断作用によるのであるから、それについては話し手の主観が充分の責任をもつ、という意味あいのものである。これに対して、「ので」は事がらのうちにすでに因果関係にたつ前件・後件が含まれていて、それをありのままに、客観的に描写する場合に使われる。因果関係にたつ事がらは二つのものであっても、その全体を一つの事態(一連の事件)として、なんら主観的な変更をも加えず叙述する、裏から言えば、「ので」で結びつけられるものについては、主観の責任がない、という意味あいのもので

(2)

ある。(前掲書206-207ページ)』と述べられている。

だから、上の説明から見たら、「から」という接続詞を使う文では、後件はすべて主観的表現(決心、希望、質問、禁止、推量、勧誘、依頼、命令、忠告)である。次に「から」を使った例文をいくつかあげる。

1. 宿題がたくさんあるから、今晚遅くまで片付けることにしましょう。
2. 私のカメラは古いから、新しいカメラが欲しい。
3. あした試験があるから、今日中に勉強したいと思う。
4. 空が暗くなってきたから、雨が降るかもしれません。
5. 外で天気がいいから、散歩に行きましょう。
6. 喉がかわいたから、水を持ってきて。
7. 自分のことだから、自分でやりなさい。
8. まだ病気はだいぶ治ってないから、外へ遊びに行ってはいけないよ。
9. あの人は性格があまりよくないから、付き合わない方がいい。

上の例はすべて主観的表現で表されている。だから、「から」で結ばれる文では、話し手の主観的表現で表されるので、聞き手は聞くまではかならずしも予測することはできないのである。永野(1952)「後件がテーマで、前件が解決である。」とも言っている。

さらに、「から」で表される文では、話し手の主観によって、主張することということだから、森田良行(1988)『日本語の類表現』(P423)とともに、次のようなことが言える。

1. 君が来いって言ったから、僕は来たんだ。
2. 電車が遅れたから、間に合わなかった。

1をみると「僕が来たのは」「君が来いって言った」からであり、自分で来ようと思ったわけではない。2については「間に合わなかったのは」「電車が遅れた」からであり、それは話し手の意志には関係ないことだと思う。この「から」はただ判断の根拠や理由を一つの主張に対して付加していく表現だからである。だから、「から」で表す文では、自分の意を主張することによって、言い訳めいた表現もできると言えるだろう。

鈴木(1990)『文法Ⅰ』では、「～から」の特徴を理解していくためには、「ので」との対比がどうしても必要になってくる。この意味で、「から」と「ので」とは、構文的にどんな違いがあるかということから、さぐりをいれてみることにするということである。

同氏は接続詞として、「～から」は次のように用言の終止形につき、「～ので」は連体形につくと述べている。

1. 雨が降るから、寒い。
2. 雨が降るので、寒い。
3. 天気が悪いから、寒い。
4. 天気が悪いので、寒い。

上の例では、動詞形容詞の場合、接続の違いは表れないが、形容動詞や断定の助動詞「～だ」

の場合は、次のように表面に表れる。

1. 部屋がきれいだから、気持がいい。
2. 部屋がきれいなので、気持がいい。
3. 大きな店だから、何でもある。
4. 大きな店なので、何でもある。

これは当然のことながら、「終止形+接続助詞」の方が、「連体形+接続助詞」よりも、区切りの力が大きい。というのは、区としての独立性の強さを意味する。

鈴木(1990)『文法Ⅰ』では、三尾は、『話し言葉の文法』で、「ていねいさの表現からみた接続助詞の順位」について、諸戯曲の中の「です体」部分をぬきだし、その内部における接続助詞の「です体」形に続く頻度数を次のようにまとめていると述べている。

接続助詞	が	けれど	もんで すから	から	し	ので	のに	と	(=たら)
%	94.5	86	76	73	58	28	20	7.3	6

(前掲書252ページ)

上記の表をみると、「～から」が「です体」をとる百分率が73%であるのに対し、「ので」は28%だった。つまり、次のようなことが言える。

1. 7時になったから、起きてね。
2. 7時になりましたから、起きてくださいね。
3. 7時になったから、起きてくださいね。

丁寧文に言いたい時に、後文だけ丁寧にすると不自然になる。例2のように「なりましたから」の方が適当だろう。この点から「から」は独立性が強いと言える。

富田(1991)『文法の基礎知識とその教え方』では、「～から」は文法的には「話し手の意志や考えを言う場合にその理由・根拠を述べる時に使われる」と説明し、次のような例文をあげている。

1. 喉が渴いたから、水を一杯ください。
2. 危ないから、ここでタバコを吸わないでください。
3. うるさいから、テレビの音を小さくしなさい。
4. 暑いから、窓を開けましょう。
5. 疲れたから、少し休みませんか。
7. 私のテレビはよく故障するから、新しいテレビが買いたいです。
8. 私は、今日、頭が痛いから、早く帰って寝ようと思っています。
9. 試験があるから、私は、今晚、部屋で勉強をするつもりです。
10. 道が込んでいるから、30ぐらいかかるでしょう。
11. 今、昼休みだから、田中さんは、食堂にいるだろうと思います。

(4)

- 12.ここは危険だから、ここで泳いではいけません。
- 13.今、使っていないから、使ってもかまいません。
- 14.試験は9時に始まるから、9時前に教室に入らなければなりません。
- 15.あしたのクラス会は自由参加だから、出なくてもかまいません。
- 16.野菜は体にいいから、毎日、食べた方がいいですよ。
- 17.タバコは体に悪いから、吸わない方がいいですよ。

「どうしてですか／なぜですか」と聞かれて、理由だけを答える時には、「～からです」という言い方をする。この言い方は「から」を使った文だけではなく、「ので」を使った文の場合にも使われる。「～ののです」という言い方はない。

上記の説明からみたら、どうして「から」は聞くまで話し手の主張を表す要素があるのだろうか。それは聞き手に納得してもらうように、自分の考えを伝えるわけである。話し手は「～から」を使って理由を述べた場合、相手はその理由を納得するだろうという気持ちがあるのではないだろうか。

以上のことから、「から」で結ばれた2文は独立性が強く、前文と後文は話し手の判断により、結びついている。また、「から」は現在、過去、未来を問わず、相手が納得する理由であると話し手が確信しているために、後文は話し手の意見、主張を表す文がくる。また、「～から」文は主観的要素の強い文だと言える。

3.「ので」の用法

「ので」は準体助詞「の」に原因を表す格助詞「で」がついたもので、連体形に接続する。

- 1.雨が降っているので、皆傘をさして歩いている。
- 2.試験が難しいと聞いたので、一生懸命に勉強をしている。

鈴木(1990)前掲書で、三尾は「です体」に接続する頻度数が「から」は73%だったと述べたが、「ので」は28%と述べている。それに従って、上の2の文は何ら不自然ではないと言えるだろう。

鈴木(1990)『文法Ⅰ』では、松下は、「標準日本口語法」で次のように説明していると述べている。

「ので」は「の」に「で」がついたもので、「で」は方法格である。拘束格ではない。

- 1.雨が「降るの」で人出が少ない。
- 2.「降雨」で人出が少ない。

の「降るの」を名詞のごとく考え、下の「降雨」と同様に考えれば、「で」が、「火事で家が焼ける」「病気で人が死ぬ」の「で」であることを知るに難しくない。(前掲書309ページ)

永野(1952)前掲書で、この松下説を支持し、次のように述べている。

「「ので」の語構成はいかにかといえば、前記の松下氏の説、すなわち、「の」に「で」（原因を表す格助詞）がついたもの、という考え方を、私は支持したい。」（前掲書201ページ）。

そして「の」は準体助詞であり、「で」は「現代語の助詞・助動詞」で「理由・根拠・原因・動機を表す格助詞」として述べたところのものであるとしている。

富田（1991）は、『文法の基礎知識とその教え方』では、「ので」は「原因・理由」を表す。原因・理由を表す助詞には、ほかに次の項で取り上げた「から」があるが、「ので」と「から」の使用は一般の社会生活ではかなり「ゆれ」ている。しかし、文法的には「『ので』は現在あるいは過去の事実に関して、その原因・理由を述べる場合に使われ、『から』は話し手の意志や考えを言う場合にその理由・根拠を述べる時に使われる」と説明されている。

それで、同氏は、日本語教育においても、この説に従って「ので」と「から」を区別して教えていると述べている。（107ページ）

○田中さんは、今日、病気なので、会社を休んでいます。

私は、昨日、病気だったので、会社を休みました。

○今日は寒いので、皆コートを着て歩いています。

昨日の日曜日は寒かったので、私は家にいました。

○私は映画が好きなので、毎週、映画を見に行きます。

私は学生の頃、映画が好きだったので、よく、映画を見に行きました。

○今日は雨が降っていたので、皆傘をさして歩いています。

昨日の日曜日は雨が降っていたので、私は家にいました。

上に「ので」は「現在あるいは過去の事実に関して、その原因・理由を述べる場合に使われる」と述べたが、過去の事実に関して、その原因・理由を述べる場合や、現在の場合でも、主語（主題）が人以外のものや、主語（主題）が人の場合でも可能の表現や習慣を述べる言い方の場合には、その文が「事実」を述べているということがわかりやすいのでそのような文の場合に「ので」を使うことは比較的やさしい。

それで同じ『文法Ⅰ』では、「～ので」の「で」を格助詞の「で」と同一のものとしてみた場合、「で」の述語となるものは、自然現象、生理現象、社会現象、それに精神現象・物理現象を表す事からの叙述にかざられるとしたが（題目52参照）、「～ので」のあとにくるものはどうだろうか。

「～ので」の用いられている文を、「日本語Ⅱ」からひろっている。

○このべっそうは、山のふもとにあるので、涼しいです。（自然現象）

○お使いに行ったり、牛や馬のいる牧場までハイキングに行ったりしているので、すっかり日にやけてしまいました。（生理現象）

○日本特有の言葉を表すのは不便なので、日本の言葉を漢字にあてはめた読みかたをす

(6)

るようになりました。(社会現象)

○私は毛の色が五色なので、人目をおそれて、この山おくに隠れて住んでおりました。

(精神現象)

○火星は、地球より小さいので、引力が弱く、そのため大気が少ない。(物理現象)

ここにはそれぞれに該当するものを一例だけあげたが、類例はほかにもいくつもある。

「で」の場合は、「あきる」「あきれぬ」「あせれる」「おどろく」「おびえる」のように心理現象を表す語にはつきにくかったが、「～ので」の後には自由に表れる。

また、

○私は、両親に死に別れましたので、親類の家の世話になりたいと思って出てきました。

○青年はまた、勝ち味があるので、うれしそうな顔つきをして、一生懸命に目を輝かしながら、相手の王様を追っていました。

○今、戦争はずっと遠くでしているので、たとえ耳をすましても、空を眺めても、鉄砲の音も聞こえなければ、黒い煙りの影すら見られなかったのであります。

など、気持、行動・状態などの客観的な叙述も可能である。

以上、「ので」の用法について述べてきたが、これらをまとめると、「ので」で結ばれた文は全体で一つと見なされ、ある事態がおこったために自然の成り行きでこうなったという原因結果の因果関係を主観を交えずに客観的に表している。よって、自分を主張する力は「から」に比べると弱い。

4. 結論：

「から」は表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に措定して結び付ける言い方、「ので」は、前件と後件とが原因・結果、理由・帰結の関係にあることが、表現者の主観を越えて、存在する場合、その事態における因果関係をありのままに、主観を交えずに描写する言い方である。

「～ので」は客観的なできごとを表す文に付かわれるのが普通であるが、「～から」は命令・意志・誘いなど話し手の意志的な態度を表す文にも使われる。

参考文献：

- 鈴木忍(1990)『文法Ⅰ』 国際交流基金
- 富田隆行(1992)『基礎表現50とその教え方』 凡人社
- 富田隆行(1991)『文法の基礎知識とその教え方』 凡人社